

「膵臓外科の実際」

神戸大学教授 齋 藤 洋 一
久留米大学教授 中 山 和 道
帝京大学教授 高 田 忠 敬

島根医科大学副学長

土 屋 涼 一

19世紀後半から20世紀初めになって、ようやく人類は膵臓疾患を認識し膵臓の構造と機能を解明しはじめた。20世紀を3期に分けてみると、膵臓外科は初めの1/3世紀が揺籃期であり、次の1/3世紀が青年期で膵臓の良性・悪性疾患に対し積極的に外科的治療を試み、現在を含む1/3世紀である成人期の基礎を作った時期であった。20世紀もあと数年となった今日、膵臓外科医として衆目の一致する齋藤洋一、中山和道、高田忠敬の3教授が編集された本書は、約90人におよぶ本邦の膵臓病を専攻する医師により執筆されたもので、執筆者の大半は外科医であるが、少数ながら高名な病理学者や内科医もそれぞれ重要なテーマについて担当されている。本書が研修医および一般病院の若手勤務医を主たる対象として編集されたものとはいえ、まことに成人期の膵臓外科の集大成といえることができる。

本書は“外科に必要な膵臓の構造と生理機能”にはじまる。この章には、膵臓の発生と異常、解剖と微細構造のほか、内外分泌について触

れ、更に膵臓と臓器相関が述べられている。第II章は“膵臓疾患における概念と規約の解説”であり、急性膵炎の重症度判定基準、慢性膵炎の臨床診断基準、膵癌取り扱い規約が解説され、わが国で発見され追究されてきた粘液産生膵癌が詳述され、膵管癒合不全や膵胆管合流異常についても述べられている。第III章は“膵臓外科における形態学的診断法”であり、近時とみに進歩発達を遂げた画像診断法による鑑別や癌進展度の診断について詳述されており、細胞診や組織診にまで言及している。第IV章は“外科に必要な膵機能検査”であり、膵外・内分泌機能検査について述べられているが、腫瘍マーカーについても記述されている。第V章は“術前後・術中管理”で、術前・術中・術後管理のほかに退院後の管理について、更に膵手術と栄養管理にまで論述されている。第VI章は“外科的治療を必要とする膵疾患の治療方針”と題し、膵外傷から膵液瘻、急性・慢性膵炎、膵嚢胞、膵癌、膵内分泌腫瘍に至るまで治療方針が記載されている。

圧巻は第VII章“膵臓の手術法”である。前章のそれぞれの項で手術様式の若干の紹介があるが、本章は膵のあらゆる手術に関して、本書の30%弱の頁数を当てて、鮮明でわかりやすい多数の図と共に詳述されており、正に手術書の感がある。第VIII章は“集学的治療”として、放射線療法、免疫化学療法、更に疼痛対策にまで言及している。第IX章“膵移植”、第X章“膵臓外科における血液浄化療法”、第XI章“膵臓外科における蛋白分解酵素阻害薬”などは最新の知見が網羅され、最後に第XII章“膵臓外科の発展とその科学の歴史”として膵臓外科を中心とした医学史が述べられている。

以上、本書はこれまでの教科書に記載されていないup-to-dateの情報が至るところにみられ、また各項目ごとに文献が紹介されていて、膵臓病に興味のある外科医はもちろん、消化器病を専攻する内科系の医師にとってもすぐれた参考書になると考える。

● B5 516頁 図275 写真115
1993 定価26,780円(税込) ㊦500

—医学書院 刊(☎03-3817-5657)